

「A と B は友達だ」の解釈について 対称性の観点から

(1)(2)はいずれも並列助詞「と」によって結ばれた主語をとるコピュラ文であるが、(1)は、2人がいずれも「大学生」カテゴリーに属するという解釈であるのに対し、(2)は、2人が「師弟」カテゴリーに属するという解釈はできず、2人の関係が師弟であるという意味である。

- (1) 佐藤君と鈴木君は大学生だ。
- (2) 佐藤氏と鈴木氏は師弟だ。

一方、(3)は、佐藤君と鈴木君が友達関係にあるという解釈（(2)と同様の解釈）と、両者がいずれも話者の友達であるという解釈（(1)と同様の解釈）が成り立つ。

- (3) 佐藤君と鈴木君は友達だ。

「師弟」と「友達」では、2者の関係に違いがある。前者の場合、2者の関係が非対称（師匠と弟子）であるのに対し、後者の場合、2者は対称関係、つまり、いずれの一方も他方から見ると友達という関係にある。

言語表現と意味内容が類似関係を示すことは類像性 (iconicity) と呼ばれ、文法レベルにおいても様々な現象が見られる (Haiman1985 等)。(2)(3)における2者の関係の違いは言語表現にも現れている。

- (4) a. 佐藤君は鈴木君 { の / と } 友達だ。
b. 鈴木君は佐藤君 { の / と } 友達だ。
- (5) a. *佐藤氏は鈴木氏の師弟だ。 / ?佐藤氏は鈴木氏と師弟だ。 / 佐藤氏は鈴木氏の師匠だ。
b. *鈴木氏は佐藤氏の師弟だ。 / 鈴木氏は佐藤氏と師弟だ。 / 鈴木氏は佐藤氏の弟子だ。

(3)は、どちらか一方を主語にして(4)のように言い換えることができ、a と b で真理条件的意味は変わらないのに対し、(2)の場合、容認度に差が生じる。まず、「X の師弟」という表現は非文であり、「A は B と師弟だ」(A が師匠、B が弟子) は逆の場合に比べ不自然となる。

西山 (2003) によると、「友達」という名詞は、「X の友達」のようにパラメータを要請する非飽和名詞であり、その値が定まらないかぎり外延が定まらない。したがって、「師匠」という名詞は、非飽和名詞ではない。同様に、「親子」「姉妹」なども非飽和名詞ではない（ただし、「兄弟」は母語話者でも判断が分かれる）。これらは、複数主語をとり、両者の関係を表す名詞である。(3)において、両者が友達関係にあるという解釈の場合、お互いに一方が他方のパラメータの役割を果たしており、両者がいずれも話者の友達という場合、パラメータは言語化されていない話者である。

次に、「友達」と同様にパラメータも必要とする名詞であっても、「親」「兄」などは様子が異なる。「A は B の親だ」と「B は A の親だ」がどちらも真であることはありえない。そのため、以下の例文は、A と B の関係を表しているのではない。

- (6) A と B は親だ。（一般的な「親」カテゴリーに属するという意味）
- (7) A と B は（私の）兄だ。

したがって、「友達」が複数主語のコピュラ文で用いられると2通りの解釈を持つことは、「友達」関係を構成する2者の対称性と大きな関わりがあると言える。同様に、複数主語のコピュラ文で2つの解釈を生む名詞に以下のようなものがある。いずれも、2者の関係には対称性が成り立つ。

- (8) ライバル、恋敵、商売敵、宿敵、政敵、天敵、仲間、同士、同類、同業者、同僚、チームメート、友人、旧友、幼なじみ、親友、同級生、親戚、家族、…

次に並列助詞「と」が結ぶ2つの名詞が対称性を喚起しやすいことを示す。寺村(1991)は、「と」で結ばれるメンバーについて、話者の頭の中ではそれらがあるセットになっており、それらがそのセットのメンバーすべてであると述べている。

- (9) 鈴木君と佐藤君は友達だ。
(10) 鈴木君や佐藤君は友達だ。
(11) 鈴木君と佐藤君も友達だ。

前述したように(9)の場合、2人の関係が友達であるという解釈と2人がいずれも話者の友達であるという解釈があるのに対し、(10)の場合、2人が友達関係という意味にはならず、2人が話者の友達という意味になる。「や」を用いるとその他のメンバーが存在することが示されるからである。同じ理由で、「AとB」の後に「も」によって他者の存在が示される場合も、2人が話者の友達という意味が優先される。

また、(3)の主語を代名詞に置き換えると、対称性が弱まり、2人が話者の友達という解釈の可能性が大きくなる。この場合に、2人が友達関係にあることを明示する場合には、(13)(14)のように表す。

- (12) 彼らは友達だ。
(13) 彼らは互いに友達だ。
(14) 彼らは友達同士だ。

このように本稿では、「AとBは友達だ」が2つの解釈を持つこと、「友達」は「親子」「師弟」などと異なり、対称性を有する関係であり、言語表現にも現れていることについて考察する。また、相互動詞構文や、「AとBは親しい」など、対称性を前提とするその他の表現についても併せて取り上げる。

主要参考文献

- 大堀俊夫(1991)「文法構造の類像性」,日本記号学会編『かたちとイメージの記号論』(記号学研究11), pp. 95-107.
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』,くろしお出版.
仁田義雄(1974)「対称動詞(Symmetrical Verb)と半対称動詞(Meso-symmetrical Verb)と非対称動詞(Anti-symmetrical Verb) 格成分形成規則のために」,国語学研究13号, pp. 1-13.
西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 指示的名詞句と非指示的名詞句』,ひつじ書房.
Haiman, J. (1985) *Natural Syntax*, Cambridge University Press.